

中国山東省における高級中学生の進路選択

— 高級中学間格差とのつながりに着目して —

張 慶 怡

(2018年10月4日受理)

Future Education Choices for High School Students in Shandong Province, China

Qingyi Zhang

Abstract: This study analyzes the future educational choices of high school students in Shandong Province, China, and explores the selection standards. In May 2018, a questionnaire survey was conducted in about 1000 first- and second-grade students enrolled at five Shandong Province high schools. The results show that the higher the status of the high school, the earlier it is for students to choose their future education. Thus, the proportion of students who select “general entrance examination” is inferred to be large. However, diverse future education routes were chosen in rural high schools where the enrollment rate is relatively low. In addition, students at high schools with higher enrollment rates are sufficiently confident in their learning abilities; therefore, the higher peer effect from their classmates influences their choice of attending the same desired university level as their peers. Majors in human sciences, such as social science studies and science, were popular among high school students with high college enrollment rates, while practical majors, such as agriculture or nursing were important choices for high school students with relatively low college enrollment rates and rural high school students. Finally, the higher the school level, the more importance students attach to their interests when choosing a university or major. However, high school students in families who did not have the opportunity to go on to higher education gave more importance to external standards, such as tuition and distance.

Key words: future path, high school students, Shandong Province

キーワード：進路選択, 高級中学生, 山東省

1. 研究の目的と意義

本研究の目的は、中国の高級中学（日本の「高校」に相当する教育段階の学校を指す。）生の進路選択の実像を分析し、個々の生徒の進路選択が高級中学間格差に与える影響について検討することである。事例として、山東省に焦点を当てる。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：山田浩之（主任指導教員）、小川佳万、古賀一博

近年、中国では急速な経済成長とそれに伴う国民の文化期待の高まりにより、特に東沿岸部の地域の大学入試志願率は年々高まっている。2016年時点で、中国の高等教育粗就学率（在校生が一定の適齢人口に占める割合）は40%を超えている。一方、中国の経済成長は地域間、階層間の所得格差の拡大を助長した。これを背景に、私的教育費負担増を伴った中国の高等教育規模の拡大や資質教育がもたらした学校内教育時間の減少が教育機会の高級中学間格差や階層間格差に与える影響には様々な点で懸念が表明されている。教育機会の格差の原因メカニズムに関する理論-EMI 仮説 (Effectively Maintained Inequality, Lucas, 2001) に

よれば、高い階層が自分の地位を保全するため、縦の学校差が観察される場合には量的な教育差を維持しようとし、縦の学校差が見えにくくなれば、質的な学校差を維持しようとする。つまり、教育拡大により量的な平等が進んだとしても、学校差によって階層差が維持されるのである。高学歴化が進み、大多数の者が進学するようになれば、進学したか否かではなく、どの学校に進学したかという、学校間の質的な差異をめぐる競争が激化する（中澤，2018）。このように、EMI仮説は、教育を通じて階層障壁が長期的に維持されるとしている。これを踏まえると、所得格差が拡大しつつある中国においては、質の高い高級中学段階の教育資源をめぐる階層間格差も拡大している可能性が推測できよう。また、一見すれば、「大学進学」は主流となっているように見えるが、教育資源をめぐる階層間競争の激化により高級中学間格差が拡大していることを踏まえば、重点校と非重点校の生徒が進路選択をする際、様々な面で異なっていることが予測できよう。進路選択は高級中学教育の「出口」における大切な一環として、さらに高級中学間格差に寄与している可能性もあろう。換言すれば、高級中学生の進路選択に関する考え方は、高級中学間格差が徐々に拡大している重要な場となっている可能性が高い。

大学入試をはじめ、多様な進路を目の前にしている高級中学生たちの選択に関して、さまざまな先行研究がなされてきた。鮑（2010）は、中国において、進路分化は比較的に早い段階で発生し、普通科高級中学に進学する生徒はほとんど大学進学という道を選択しているのが現状であると指摘した。また、徐（2005）は、中国安徽省、上海にある普通科高級中学の三年生を対象とした研究により、大学進学という道を希望する者の割合は96.3%に達していることを明らかにしている。これらの先行研究によれば、中国において、普通科高級中学の卒業生の中で、大学進学を選ぶ割合が圧倒的に大きいことがわかる。しかしながら、これらの先行研究には、以下の二つの問題がある。一つは、「大学進学を希望しているか否か」を唯一の判断基準としていることに加え、公表された進学率データに基づいて進学希望の割合を算出することが一般的となっていることである。大学進学の具体的なルート、並びに学歴意識、進路選択の基準などに関する分析が蓄積されていない。もう一つは、中国において、大学生の募集政策は省ごとに異なっており、各大学/各学科の入学定員数は毎年、省ごとに割り振られている。つまり、大学、とりわけ、入学定員数が極めて少ない一流大学の進学機会の省間格差は大学の分布や国の省別募集政策の影響が大きい。ゆえに、全国各省の被調査者の進路選択

は出身階層などの社会経済的な要素だけではなく、高等教育資源や政策の違いとの関連も無視できない。換言すれば、高級中学生の進路選択の実像、また社会的な要素との関連を解明するには、（省間の）大学分布や政策の違いを統制すること、すなわち、特定の省に焦点をあて、大学に進学する前の高級中学生徒に着目する必要がある。

以上を踏まえ、本稿では、山東省に焦点を当て、様々な可能性に直面している主体－高級中学生に着目し、彼らはどのような進路選択をしているのか、さらには高級中学間格差との間にどのような関連があるのかを解明したい。

2. 調査の方法

2.1 調査の内容

アンケート調査は、2018年5月に山東省に位置する5つの普通科高級中学に在籍する1年生と2年生（約1000人）を対象として実施した。配布された920部の質問紙の内、889部を回収した。なお、有効回答票数は863部である。

調査対象を三つの行政区画、5つの高級中学に選定したのは、高級中学生の進路選択を解明するため、調査対象の範囲を家庭背景と学業達成の面から広めたほうが効果的であると判断したからである。

調査項目として、本稿では大きく「出身階層」「進路選択」「大学や専攻の選択」、進路選択に影響を与えやすい諸変数－「自己効力感」「学歴意識」「大学や専攻の選択基準」に分けている。

2.2 調査対象校の概要

調査対象校の概要は表1となっている。学校の所在地、学年、性別、コース別の調査対象者数とその割合から構成され、最後に各高級中学の一期募集校⁽¹⁾の進学率を提示している。

2016年における一期募集校の進学率から見れば、A校とC校の進学率は最も高く、特に市にあるA校は75%に達している。また、中国の大学入試は6月に実施されるため、受験生の3年生に対する調査を控えることにした。ゆえに、1年生と2年生に質問紙を配布した。性別に関して、高級中学によって性別比が大きく異なっていることがわかる。特にD校において、女性の割合が大きいことが見られよう。しかし、本調査は高級中学生の進路選択の全体像に関して分析するものであるため、特定の学校における男女の差はそれほど大きな影響要因だとは言えないだろう。次に、中国の山東省において、高級中学2年から文系、理系に

表1 調査対象校の概要

		A校	B校	C校	D校	E校	計
回答者数(人)		170	145	183	191	200	889
有効回答者数(人)		163	141	178	190	191	863
回収率(有効回答者数/回答者数)		95.90%	97.20%	97.30%	99.50%	95.50%	97.10%
所在地		省主要都市の市内	省主要都市の市内	地方都市の所属県	地方都市の所属県	(地方都市の) 県の所属鎮	
学年	一年生(%)	31.9	29.8	48.3	49.5	50.8	371(43%)
	二年生(%)	68.1	70.2	51.7	50.5	48.7	491(57%)
性別	男(%)	44.2	46.8	36.5	24.7	58.6	362(41.9%)
	女(%)	55.8	53.2	63.5	75.3	41.4	501(58.1%)
コース	文系(%)	28.2	36.2	27.5	26.8	28.8	252(29.2%)
	理系(%)	39.9	34.8	25.3	24.7	25.7	255(29.5%)
	未分(%)	31.9	29.1	47.2	48.4	45.5	356(41.3%)
一期募集校の進学率(2016年)(%)		75.00	10.00	27.40	11.40	0.00	

分けるので、高級中学1年生のコースはすべて「未分」となっている。

以上のように、調査対象は多様な高級中学からなっている。したがって、ここでの研究結果は現在の高級中学生の進路選択の実態を概観する上では十分であろう。

3. 研究結果

3.1 対象高級中学間の格差—階層分布の特徴に着目して

本章では、質問紙から得られた結果を検討したい。まず、本節では、階層分布を通して対象高級中学間の格差を概観する。

前述したように、所得格差が拡大しつつある中国において、質の高い高級中学段階の教育資源をめぐる階層間競争が激しくなり、高級中学間格差が拡大している可能性が推測できよう。したがって、本調査では、階層分布の面を対象高級中学間の格差を分析するため、質問項目に「両親の学歴」と「両親の職業」などの出身階層の項目を入れている。結果は表2と表3のようになっている。

表2からわかるように、両親ともに「大学卒業」と「大学院卒業」の割合はA校からE校へとだんだん低下する傾向にあり、一方、「中卒とその以下」は増加する傾向にあることがわかる。また、政府機関あるいは事業単位、大中型企業の中高級管理者と私営企業主、専門技術要員(教師、医者、科学技術など)の割合はA校からE校へと減少していくことも見られよう。また、工場の労働者、および農民家庭出身の生徒はD校とE校に集中している。

また、表3からわかるように、大学進学率が最も高いA校では、都市部出身の生徒は66.9%で最も高く、一方E校に在学する農村部出身の生徒の割合は圧倒的に多く、84.8%となっている。一人っ子の割合を見れば、A校は60%を超え、他の高級中学、特に県や鎮

にある高級中学の割合は40%以下となっている。「実家に勉強専用の部屋があるか否か」を聞いた質問は各家庭の経済状況、また子どもの教育に対する重視度を測定するものであり、その結果、「ある」と選択した生徒の割合がA校の92%からE校の73.3%に低下していた。

このように、大学進学率が高い高級中学、また市にある高級中学には、高い階層(学歴や職業)から出身した子どもが集中していることがうかがえよう。この差は高級中学生の進路選択にいかなる影響を及ぼしているのだろうか。次節では、所在地、学校ランク、および在学する生徒の出身階層などで大きく異なる5つの高級中学の高級中学生の進路選択、大学の専攻分野の選択、またその中に窺える高級中学間格差を具体的なデータを通して検討していく。

3.2 対象生徒の進路選択の実像

本節では、調査対象である5つの高級中学に在学している生徒の進路選択と専攻選択の実像を高級中学別に概観し、また高級中学生が大学・並びに大学の所在地に対する期待を解明したい。調査結果は以下となっている(表4、表5、表6)。

表4を見れば、A校とC校に在学する生徒に、「一般入試」を選ぶ割合が最も大きいことがわかる。一方、鎮にあるE校の生徒の中に、「一般入試」と答えた生徒の割合は50%未満となり、「芸術、スポーツ入試」の割合は35.6%で最も高くなっている。また、「まだ決めていない」の欄では、A校からE校へ、割合がだんだん上がっていくことが見られよう。さらに、E校においては「春季入試」と「軍隊に入る」を選んだ生徒も現れ、進路選択の多様化が見られる。

これらの結果から、大学進学率が高い重点校であるほど、進路選択が早く、「一般入試」を選択する生徒の割合が大きいことがわかる。また、進学率が比較的

表2 調査対象校の階層分布

		A校	B校	C校	D校	E校	計	
父親の最終学歴 (%)	中卒とその以下	18.4	37.6	65.7	63.7	80.6	55.0 (475人)	***
	高級中学卒業	13.5	33.3	18.0	20.0	14.1	19.2(166人)	
	中、大専門学校卒業	26.4	14.2	9.6	12.6	3.1	12.7(110人)	
	大学卒業	34.4	8.5	5.6	3.2	1.6	10.1(87人)	
	大学院卒業	7.4	6.4	1.1	0.5	0.5	2.7(23人)	
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
母親の最終学歴 (%)	中卒とその以下	25.8	45.4	69.7	73.7	88.5	62.5(539人)	***
	高級中学卒業	12.3	28.4	15.7	12.6	7.9	14.7(127人)	
	中、大専門学校卒業	26.4	14.2	10.1	10.0	2.1	12.1(104人)	
	大学卒業	28.8	4.3	4.5	2.6	1.0	7.9(68人)	
	大学院卒業	6.7	7.7	0.0	1.1	0.5	2.4(21人)	
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
父親の職業 (%)	政府機関あるいは事業単位	27.6	11.3	6.7	6.8	0.0	10.0(86人)	***
	大中型企業の中高級管理者と私営企業主	13.5	7.1	2.2	2.1	2.1	5.1(44人)	
	専門技術要員(教師、医者、科学技術など)	17.8	11.3	7.3	2.6	2.6	7.9(68人)	
	行政事務要員	3.1	0.7	1.7	1.1	0.5	1.4(12人)	
	個人経営商工業者とサービス業	25.8	41.1	28.1	24.2	17.8	26.7(230人)	
	工場の労働者	7.4	20.6	32.6	41.1	52.4	32.2(277人)	
	農民	1.2	5.0	15.7	18.4	23.0	13.5(116人)	
	無職	2.5	2.1	1.7	1.1	1.0	1.6(14人)	
その他	0.6	0.7	3.4	2.6	0.5	1.6(14人)		
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
母親の職業 (%)	政府機関あるいは事業単位	22.7	3.5	3.4	4.2	0.5	6.6(57人)	***
	大中型企業の中高級管理者と私営企業主	9.2	5.7	3.9	1.6	2.1	4.3(37人)	
	専門技術要員(教師、医者、科学技術など)	19.6	8.5	5.6	5.8	2.1	8.0(69人)	
	行政事務要員	1.8	2.8	0.6	0.5	0.5	1.2(10人)	
	個人経営商工業者とサービス業	30.7	42.6	28.1	24.7	14.7	27.3(235人)	
	工場の労働者	4.3	14.9	27	32.6	39.3	24.7(213人)	
	農民	1.8	5.7	20.8	22.6	34.6	18.2(157人)	
	無職	8.6	14.2	8.4	5.3	5.8	8.1(70人)	
その他	0.6	2.1	1.7	2.6	0.5	1.5(13人)		
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

注：表中には χ^2 検定の結果を*: $p<0.05$ 、**: $p<0.01$ 、***: $p<0.001$ と示している。（以下の表の同様に表記した）

表3 対象生徒の家庭所在地など

		A校	B校	C校	D校	E校	計	
家庭所在地 (%)	都市	66.9	43.3	2.8	0.5	0.5	20.7(177人)	***
	県	17.2	13.5	34.8	34.2	14.7	23.6(202人)	
	農村部	14.1	41.8	62.4	64.2	84.8	55.7(477人)	
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
一人っ子 (%)	はい	62	40.4	34.8	28.9	32.5	39.1(337人)	***
	いいえ	38	58.9	65.2	71.1	67.5	60.9(525人)	
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
実家に勉強専用の部屋がありますか (%)	はい	92	88.7	87.1	81.1	73.3	84.0(724人)	***
	いいえ	7.4	11.3	12.9	18.9	26.7	16.0(138人)	
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

に低い農村部の高級中学に、進路選択の多様化が見られる。「就職」の割合は、いずれの高級中学であっても4%以下であり、非常に少ないことがわかる。

次に、大学進学が主流となっている現状を踏まえ、高級中学生が大学進学にどのような期待を持っている

のかを検討したい。表5に示しているように、本調査では大学進学に対する期待について「大学のレベルに対する期待」と「大学の所在地に対する期待」に分けて聞いている。

「どのレベルの大学に進学したいのか」について、

表4 対象高級中学生の進路選択

		A校	B校	C校	D校	E校	計
卒業後の進路選択 (%)	一般入試	87.70	78	88.80	81.60	43.50	75.6(649人)
	芸術、スポーツ入試	1.20	9.20	2.80	4.70	35.60	11.3(97人)
	就職	3.10	1.40	2.20	2.60	2.60	2.4(21人)
	留学	3.70	3.50	0.60	3.20	1.60	2.4(21人)
	まだ決めていない	4.30	5.0	5.60	6.30	10.50	6.5(56人)
	その他	0.0	0.70	0.0	1.10	1.60	0.7(6人)
	春季入試	0.0	0.0	0.0	0.0	3.70	0.8(7人)
	軍隊に入る	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2(2人)
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表5 対象高級中学生の大学所在地に対する期待

		A校	B校	C校	D校	E校	計
大学のレベルに対する期待 (%)	211/985大学	89.6	49.6	56.2	37.9	28.8	51.8(443人)
	元二期募集大学	7.4	27	35.4	38.9	35.1	29.7(254人)
	元三期募集大学	0.0	12.8	7.3	19.5	25.1	13.6(116人)
	元三期募集大学	0.0	2.1	0.0	1.1	7.9	2.3(20人)
	高等職業学校	0.0	2.1	0.0	0.0	1.6	0.7(6人)
	留学	3.1	2.8	0.6	2.1	0.0	1.6(14人)
	進学しない	0.0	0.0	0.0	0.5	1.0	0.4(3人)
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
大学の所在地に対する期待 (%)	北京・上海のような大都市	53.4	36.9	38.8	33.2	27.2	37.6(323人)
	各省の主要都市	23.3	24.1	38.8	34.7	29.8	30.7(264人)
	山東省内の主要都市	16.6	30.5	18.5	25.8	35.6	25.6(220人)
	実家に近い小都市	0.0	2.1	1.1	1.6	4.2	1.9(16人)
	国外	6.7%	6.4	2.2	4.2	2.1	4.2(36人)
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

A校の生徒の89.6%は一流大学である211/985大学を選んでいる。その原因は、A校の生徒が自分の学習能力に対して十分な自信を持ち、同じ学校に在学する同級生からのピア効果にも影響されていることであると推測できよう。一方、E校に在学する生徒のうち、「211/985大学」⁽²⁾を選んだ生徒は28.8%にすぎない。これに対し、「元二期募集大学」「元三期募集大学」「高等職業学校」の割合をあわせれば約35%に達しており、5つの高級中学の中で最も高くなっていった。

また、「どのような場所の大学に進学したいか」については、高級中学IとC校の生徒で「北京・上海のような大都市」と「各省の主要都市」を選択した生徒の割合が約80%に達していた。とくにA校において、50%を超える生徒が北京・上海のような大都市にある大学への進学を希望していることがわかる。一方、B校とE校において、山東省内の大学に進学したい生徒の割合は高い。特にE校において、「山東省内の主要都市」「実家に近い小都市」を選んだ生徒の割合は40%近くになっている。

さらに、5つの高級中学の生徒はどのような専門分野に興味を持っているのか、また実際に選ぶ時にどの専攻を選択するのかについて検討しよう。なお、本調査では、中国教育部により公表されている大学の13の

専攻分野を用いている。調査結果は表6となっている。表6から、大学進学率が比較的に高いA校とC校において、人間科学分野の「社会科学系」(30.7%/18.0%)と「理学系」(19.6%/19.1%)を実際に選ぶ生徒の割合が最も大きいことが確認できる。一方、D校、E校において、「農学」、「医・看護・保健学系」を選択した生徒の割合が大きい。特に農学系の割合を見れば、「興味のある」生徒の割合はいずれも0.5%であるのに対し、実際に選択する生徒の割合はそれぞれ12.6%、17.8%に達している。これは、D校とE校の生徒の中に、農村部出身の生徒の割合が大きいためだと推測される。また、医・看護・保健学系の割合を見れば、E校の生徒の中に、興味のある生徒の割合は13.6%であるのにも関わらず、実際に選ぶ割合は27.2%となっている。その原因は、医・看護・保健学系の中の看護専攻と保健専攻は中国において、ほとんどレベルの低い高等専門学校に属し、入学するための点数も低いところであろう。また、看護専攻の大学生が卒業後、各病院への就職を専門学校から紹介されることが一般的である。これも看護と保健専攻が人気になる理由となるだろう。

3.3 進路選択における高級中学間格差

以上の分析から、階層分布、進路選択、並びに専攻選択などの面において、高級中学間に顕著な差があるように見られる。しかし、以上の分析では変数相互の影響力が考慮されていないため、階層分布、進路選択などの違いと高級中学との間に、どのような関係があるのかは断言できない。そこで、高級中学ランクを従属変数、出身階層、進路選択、進路選択に影響を与えやすい諸変数-自己効力感、学歴意識、大学や専攻の選択基準を独立変数とした二項ロジスティック回帰分

析を行い、以上の変数が高級中学ランクに対する影響を分析することで、異なるランクの高級中学において、階層分布の差や進路選択の差があるか否かを明らかにしたい。分析に使用する変数は、表7の通りである。

ここで、ロジスティック回帰分析で用いられている従属変数と独立変数について説明しておこう。まず、従属変数として、進学率により「重点校」であるか否かのダミー変数を採用した。独立変数には、まず、出身階層の変数は「親の最終学歴のダミー変数」、[専門・管理職のダミー変数]、「工・農業労働者のダミー変数」

表6 大学の専攻分野に関する選択（興味のある学生の割合 / 実際に選ぶ学生の割合）（%）

	A校		B校		C校		D校		E校	
	興味	実際								
人文科学系（哲学、文学、歴史学など）	10.4	9.8	10.6	12.1	14.0	12.9	8.9	10.5	5.8	5.8
言語学系	4.3	3.7	3.5	4.3	9.0	7.9	10.0	7.4	3.1	2.1
社会科学系（経済学、経営学、法学、管理学など）	25.8	30.7	12.8	16.3	18.0	18.0	18.4	22.6	8.4	10.5
教育学系	1.2	2.5	1.4	2.1	2.2	0.6	3.2	3.7	0.5	3.1
心理学系	5.5	3.1	17.0	4.3	10.1	5.1	10.5	4.7	9.9	8.9
理学系（物理、化学、情報科学、生物、天文など）	20.9	19.6	11.3	12.1	19.1	19.1	7.9	7.9	12.0	8.4
工学系（機械、建築など）	6.7	8.6	3.5	4.3	4.5	4.5	2.6	2.1	5.8	0.5
農学系	1.8	1.8	1.4	0.7	0.6	0.6	0.5	12.6	0.5	17.8
医・看護・保健学系	7.4	7.4	12.1	15.6	10.1	11.8	11.1	7.4	13.6	27.2
芸術系と体育系	6.7	3.7	10.6	9.9	5.1	3.9	8.4	5.3	25.1	5.2
国防生・警察専攻	6.1	4.3	7.1	7.1	3.9	4.5	7.9	14.7	7.9	8.4
師範学生	1.8	3.1	5.0	8.5	3.4	11.2	8.9	0.5	6.3	2.1
その他	1.2	1.8	3.5	2.8	0	0	1.1	0	1.0	0

注：各セルの数値は、各校でそれぞれの専攻分野に興味を持つ者、および実際にその専攻を選ぶ者の割合を示している。例えば、左上の「10.4」は、A校の調査対象者のうち「人文科学系」に興味を持つ者が10.4%であることを示す。

表7 ロジスティック回帰分析に使用する変数

従属変数
高級中学のダミー変数：本研究では、進学率によって高級中学を二つのグループに分けている。各グループを「重点校」と「普通校」と命名する。「重点高級中学」という用語はすでに廃止されているが、高級中学間格差は依然として「示範高級中学」などの言い方で維持されつづける。したがって、分かりやすく分析するために、本研究では「重点校」と「普通校」の分け方をすることにした。 具体的に、重点校なら1、普通校なら0。また、大学進学率が圧倒的に高いA校を重点校として分析している。
独立変数
A. 出身階層：
a. 親の最終学歴のダミー変数：大卒とその以上は1、高卒とその以下は0。
b. 管理・文化職のダミー変数：管理・文化職なら1、逆の場合は0。 （管理・文化職の範囲：政府機関あるいは事業単位、大中型企業の中高級管理者と私営企業主、専門技術要員）
c. 工・農業労働者のダミー変数：工・農業労働者なら1、逆の場合は0。 （工・農業労働者の範囲：工場の労働者、農民、無職）
d. 実家の所在地のダミー変数：都市部出身なら1、農村部出身は0。
B. 進路選択：
一般入試を選ぶ場合は1、就職、留学、芸術入試、スポーツ入試、未決定なら0。
C. 自己効力感：
「能力に対する効力感」に関する2つの変数：「自分は勉強でいい成績を取れると信じている」、「自分の学習能力を疑うことが少ない」。「進学結果に対する自信」に関する4つの変数：「本科以上の大学に合格する自信がある」、「211、985大学に合格する自信がある」、「大学の目標を下げようと思うことがよくある」、「大学入試は自分にとって大きな負担である」それぞれについて1点（全く当てはまらない）から4点（とても当てはまる）の得点を配分している。
D. 学歴意識：
学歴意識に関する3つの変数「入試は人生を変える大切なきっかけだと思う」、「大学のレベルによって人生は決まると思う」、「大都市志向」（大都市の大学に行きたいかどうか）それぞれについて1点（全く当てはまらない）から4点（とても当てはまる）の得点を配分している。
E. 大学や専攻の選択基準
選択基準に関する3つの因子（「卒業しやすさ」、「大学の名声」、「興味や関心」）得点。

と「実家の所在地のダミー変数」から構成されている。次に、「一般入試に参加するか否か」のダミー変数によって進路選択の独立変数を入れている。また、進路選択に影響を与えうる「自己効力感」変数は「自分の能力に対する効力感」（「自分は勉強でいい成績を取れると信じている」と「進学結果に対する自信」（「本科以上の大学に合格する自信がある」、「211、985大学に合格する自信がある」、「大学入試は自分にとって大きな負担である」）に、「学歴意識」を「大学のレベルによって人生は決まると思う」、「大都市志向」（大都市の大学に行きたいかどうか）に分けられ、それぞれについて1点（全く当てはまらない）から4点（とても当てはまる）の得点を配分している。

最後に、「大学や専攻の選択基準」、つまり高級中学生はどのような基準を持ち、またそれに従い大学や専攻を選ぶのかを独立変数として用いている。具体的には、「興味のある専攻分野があること」、「魅力的な授業があること」、「知名度が高いこと」、「競争率が高いこと」、「教員のレベルが高いこと」、「就職が良いこと」、「施設や設備が良いこと」、「教員免許が取れること」、「学費が安いこと」、「自宅から近いこと」、「単位が簡単に取れること」、「友人と一緒に入学すること」、「勉強せずに遊べること」の13個の項目に分けている。より分かりやすく分析するため、本稿では、「大学や専攻の選択基準」の13個の項目について因子分析をし、最終的に4つの因子を抽出した。その上で、第3因子まで採用し、第一因子「卒業しやすさ」、第二因子「大学の名声」、第三因子「興味や関心」というように命名することにした。表8はそれぞれの因子得点である。

以上の従属変数と独立変数を用い、二項ロジスティック回帰分析を行った。表9は、分析を行った結果である。階層の諸変数の中では、父親の学歴（高等教育機関卒であるか否か）、母親の職業（専門・管理職であるか否か）、父親の職業（工・農業労働者であるか否か）、都市部出身ダミーが高級中学間格差に影響を及ぼしている。この結果に基づき、「教育拡大により量的な平等が進んだとしても、今度は学校差によって階層差が維持される」というEMI仮説の主張を一定の程度で検証する可能性が見られよう。

次に、進路選択の独立変数を見れば、高級中学生が大学進学のための一般入試に参加するか否かは高級中学間格差に影響していないことがわかる。表4の平均値から見れば、E校を除き、一般入試に参加する割合の高級中学間格差はそれほど明確なものではない。これは、山東省において、高級中学生の全体的な大学入試志願率が高く、極端な状況がなければ、どのレベルの普通科高級中学でも一般入試に参加する生徒の割合

が大きいと推察される。

さらに、進学選択の結果と関連するであろう高級中学生の大学進学に対する自信、すなわち自己効力感の独立変数を見てみよう。結果からは、自分の能力に対する自信における差が見られていないのに対し、「本科（普通の研究型大学を指す）以上の大学に合格する自信がある」、「211、985大学に合格する自信がある」、「大学入試は自分にとって大きな負担である」の三つの変数において、重点校と非重点校との間の格差に大きな影響を及ぼしていることがわかる。ここから、大学進学結果への予測、特にレベルの高い大学に合格する自信があるかどうかは高級中学間格差に正の影響を強く与えていることが指摘できよう。次に、学歴意識に関する変数「大学のレベルによって人生は決まると思う」と大都市志向は高級中学間格差に貢献していないことが窺えよう。最後に、大学や専攻の選択基準に関して、「大学の名声」と「興味や関心」について、いずれの高級中学の生徒も重要視しているのに対し、重点校に在学する生徒ほど、「卒業しやすさ」を重視する程度が低いことが見られている。つまり、非重点校の生徒ほど、「教員免許が取れること」、「学費が安いこと」、「自宅から近いこと」、「単位が簡単に取れること」、「友人と一緒に入学すること」、「勉強せずに遊べること」を重視している。なお、表は省略しているが、各項目の高級中学別平均値を見れば、「学費が安いこと」の項目において、高級中学ランクごとに異なっていることが見られる。県や鎮にあるC校、D校とE校の平均値が高く、特に農村部にあるE校は圧倒的なレベルとなっている。これに対し、A校において、学費への重視度は比較的に低い。その原因は、A校は都市部にあり、在学する生徒の出身階層も高く、学費を考慮せずに大学や専攻を選択することができることであろう。次に、大学を選択する際に、自宅からの近さを重視する程度を測定したところ、A校やC校の平均値は最も低いことが確認できる。こうした結果は、出身階層が比較的高い重点校の生徒にとって、経済的な理由で「自宅」から遠い大学への進学を諦める必要がないことを意味しているのではないか。最後に、大学のカリキュラムの難易度に対する重視度を測定するため、「単位が簡単に取れること」を項目に入れた。結果から見れば、非重点校の生徒にとって単位を簡単に取れることは重要な要素であるが、重点校の生徒にとってはあまり重要な要素ではないことがわかる。これは、自分の能力に対し自信を持ち、また経済的な余裕がある重点校の生徒にとって、テストで失敗して卒業できないリスクを考慮せずに大学や専攻を選択することができるからと推測できよう。

表8 大学や専攻の選択基準 (因子分析)

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
	卒業しやすさ	大学の名声	興味・関心	
教員免許が取れること	0.655	0.222	-0.223	-0.036
学費が安いこと	0.393	0.03	-0.048	0.597
自宅から近いこと	0.37	-0.05	-0.009	0.283
単位が簡単に取れること	0.577	-0.129	0.172	0.165
友人と一緒に入学すること	0.478	-0.095	0.158	0.135
勉強せずに進べること	0.803	0.054	-0.01	0.011
知名度が高いこと	0.043	0.475	0.171	-0.147
競争率が高いこと	0.069	0.409	0.015	-0.021
教員のレベルが高いこと	-0.027	0.538	0.197	-0.052
就職が良いこと	-0.072	0.589	-0.108	0.223
施設や設備が良いこと	-0.082	0.506	0.131	0.282
興味のある専攻分野があること	-0.101	0.149	0.419	0.04
魅力的な授業があること	0.203	0.035	0.596	-0.083
固有値	3.742	1.673	1.092	1.008
累積寄与率	24.28%	32.71%	36.51%	39.61%

因子抽出法：最尤法のプロマックス回転

表9 高級中学間格差に関する二項ロジスティック回帰分析

従属変数	重点校ダミー
出身階層	
父学歴 (高等教育機関卒)	1.053**
母学歴 (高等教育機関卒)	-0.085
父職 (専門・管理職)	0.052
母職 (専門・管理職)	1.107**
父職 (工・農業労働者)	-0.957*
母職 (工・農業労働者)	-0.169
都市部出身ダミー	2.1***
進路選択	
一般入試に参加するか否か	0.569
自己効力感 (能力に対する自信+進学結果に対する自信)	
自分は勉強でいい成績を取れると信じている	-0.336
「本科」以上の大学に合格する自信がある	0.53*
「211」、「985」大学に合格する自信がある	0.609**
大学入試は自分にとって大きな負担である	0.341*
学歴意識	
大学のレベルによって人生は決まると思う	0.122
どのような場所 (の大学) に行きたいのか	-0.132
大学や専攻の選択基準	
卒業しやすさ	-0.672***
大学の名声	0.202
興味や関心	-0.069
定数	-6.437***
正分類パーセント	90.1

4. まとめと考察

本研究は、中国山東省における高級中学生の進路選択の実像を分析し、個々の生徒の進路選択が高級中学間格差に与える影響について検討するものである。以下の点について検討を行った。第1に、階層分布などの面から対象高級中学間の格差を分析することである。第2に、高級中学生の進路選択の実態である。第3に、個々の生徒の進路選択が高級中学間格差にどのような影響を与えているか、換言すれば、重点校と非重点校の間に、進路選択はどう異なっているのかを統計的手段を用いて分析することである。

第1の点について検討した結果、進学率が高い高級中学、また市にある高級中学には、高い出身階層 (学歴や職業) の子どもが集中していることがわかった。また、統計的な方法で出身階層と高級中学ランクの関係を測定した結果、父親が高等教育機関卒 / 工・農業労働者であるか否か、母親は専門・管理職であるか否か、都市部出身であるか否かは高級中学間格差に影響を及ぼしていることが明らかになった。

第2の点について検討することで、高級中学生の進路選択と (大学進学の場合) 専攻選択の実像、並びに高級中学生が大学と大学の所在地に対する期待を概観することができた。結果から見れば、進学率が高い高級中学であるほど、早期に進路選択をし、そして「一般入試」を選択する生徒の割合が大きい傾向が見られているが、その差がそれほど大きなものではないことがわかる。また、A校の生徒が自分の学習能力や進学結果に対して十分な自信を持っており、進学する大学のレベルに対する期待が高く、大学の所在地に関しても「大都市志向」が見られた。次に、大学進学する際における専攻分野に関する調査結果から、重点校において、人間科学分野の「社会科学系」と「理学系」を実際に選ぶ生徒の割合がもっとも大きいことが明らかになった。一方、農村部にあり、非重点校であるD校、E校において、「興味のある」生徒の割合は低いにも関わらず、「農学」、「医・看護・保健学系」を実際に選択する生徒の割合が大きいことも明らかになった。その原因は、「農村部生徒は農業に従事している両親から影響されていること」、「看護・保健学系の合格点数が低いことで無事に進学するための「手段」となっていること」、また「卒業後に仕事を見つけれないリスクが低いこと」などが挙げられよう。

第3の点について統計的に検討した結果、高級中学生が大学進学のための一般入試に参加するか否かは高級中学間格差に有意な影響を及ぼしていないことが明らかになった。そして、進路選択に影響を及ぼしやすい

「自己効力感」,「学歴意識」や「大学や専攻の選択基準」の効果を分析した結果,重点校の生徒ほど,進学結果への予測は高く,そしてそれが高級中学間格差に正の影響を及ぼしていることがわかった。また,大学や専攻の選択基準に関して,進学率が高い高級中学に在学する生徒ほど,第1因子の「卒業しやすさ」を重視する程度が低いことが見られている。

これらの知見に基づき,以下の2点について考察したい。

まず,中国,少なくとも研究対象である山東省において,「一般入試」に参加するかどうかにおける高級中学間格差はそれほど大きなものではない。ここから,山東省において,高級中学生の全体的な大学入試志願率が高くなっていることが推測できよう。しかし,専攻の選択,並びに進学結果に対する予測や進路の選び方には,高級中学間に明確な差が見られている。そして,各学校の一期募集大学進学率を見れば,学校の階層化が生徒の進路を規定している可能性も見られよう。これらを踏まえ,進路選択やその考え方における差,さらに学校の階層構造は高級中学生の学習意欲や実際の学習行動,さらに最終的な進学結果にどのような影響を及ぼしているのかを,今後の課題として提示したい。

次に,本研究の結果に基づき,中国におけるEMI仮説の妥当性を検証しよう。EMI仮説とは「教育拡大により量的な平等が進んだとしても,今度は学校差によって階層差が維持される」とするものである。しかし,各階層がいかに質の高い教育機会を手に入れるのかは,文化背景によって異なる。本研究は,「高い階層がより良い学校の教育資源を獲得することができる」というEMI仮説の主張が成立するかどうかを検証することにとどまらず,生徒の進路選択に関する各側面からその成立のメカニズムを中国の文脈で解明しようとしている。分析結果から見れば,質の高い高級中学の教育資源を獲得できるかどうかは親の職業や学歴と深く関わっている。さらに,高級中学段階の教育にとどまらず,対象生徒の進路選択から,出身階層の直接的な効果や高級中学段階の教育を経て加熱された間接的な効果が高等教育段階に浸透している可能性が見られると言って過言ではない。高い出身階層の子どもはより良い高級中学に進学し,圧倒的に多い大学進学機会を手に入れ,自分の興味で大学の専攻分野を選んでいるのに対し,低階層の子どもは普通の高級中学に在学する割合が高く,しかも実用性が高く,競争率が低い専攻を選ぶのが現状となっている。換言すれば,EMI仮説が主張している出身階層の効果は中国において持続的であり,良い高級中学の教育機会の獲得

だけではなく,高級中学という場で加熱しながら高等教育段階へと浸透している。今後の課題として,異なる出身階層の高級中学生徒の学習意欲,学習行動,並びに家庭の教育投資について調査し,それに基づいてEMI仮説が成立するメカニズムをさらに検討したい。

【注】

- (1) 中国における募集期間が最も早い上位大学のグループを指す。募集期間により「一期募集校」,「二期募集校」,「三期募集校」に分けている。山東省において,「一期募集校」,「二期募集校」,「三期募集校」の募集期間はすでに合併されている。しかし,大学間の序列化は緩和されていない。
- (2) 中国では世界水準の大学創出のために1990年代前半に四年制大学約100校を選定した。「21世紀をリードする大学100校」という意味で選定された大学を一般に211大学と呼ぶ。その後1998年5月に世界トップレベルの大学を創出するため,その中の30校を特に選定して研究経費等を重点的に配分している。「985大学」と呼ばれる。

【引用・参考文献】

- Samuel R. Lucas, 2001, Effectively Maintained Inequality: Education Transitions, Track Mobility, and Social Background Effects, *The American Journal of Sociology*, Vol.106, No. 6, pp.1642-1690.
- 小野寺香,「中国の大学入試における格差是正措置」,小川佳万編『アジアの大学入試における格差是正措置』広島大学高等教育研究開発センター,2017,25-38頁。
- 大塚豊,『中国大学入試研究—変貌する国家の人材選抜』,2007,東信堂。
- 鹿毛雅治,『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』,金子書房,2013,39-40頁。
- 苅谷剛彦,『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂,2001,143-164頁。
- 竇心浩,「1990年代における中国高等教育機会の地域間格差—省別学生募集制度に着目して」,『教育社会学研究』第80集,2007,311-330頁。
- 中澤 渉,「日本の教育選択におけるEMI仮説の検証」,『2015年SSM調査報告』,2018,113-134頁。
- 藤原翔,石田浩,「大学選択の社会経済的格差とその変容」,『日本教育社会学研究』,2012。
- 藤原翔,「進学率の上昇は進路希望の社会経済的格差を縮小させたのか—2002年と2012年の比較分析」,

- 『格差社会の中の高校生』, 2015, 21頁。
- 山口源, 堀井俊章, 「高校生の「とりあえず進学」と進路選択自己効力との関連に関する分析」, 『教育デザイン研究』(第8号), 2017。
- 鲍威, 「大学的门槛: 升学选择背后的约束因素与分析」, 『教育发展研究』, 2010。
- 徐国兴, 「高中生的大学升学抱负和升学选择」, 『高等教育研究』(第26卷, 第10期), 2005。
- 張宜君, 林宗弘, 「高等教育擴張與階級不平等: 以台灣高等教育改革為例」, 台灣社會學會2013年度研討會, 2013。
- 赵晓雨, 「社会分层对高等教育入学机会的影响-基于武汉市4所高校的实证研究」, 华中科技大学硕士学位论文, 2013。
- 朱志颖, 「社会分层对高等教育入学机会的影响-基于昆明市四所高校的实证研究」, 云南大学硕士学位论文, 2016。